

氏名	う かい だい すけ 鵜 飼 大 介
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 385 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 環 境 相 関 研 究 専 攻
学位論文題目	文 字 認 識 の 近 代

論文調査委員 (主査) 教授 大澤真幸 教授 佐伯啓思 教授 道簾泰三
教授 富永茂樹

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、西洋近代社会における「文字と言語の認識」の展開過程を追う思想史研究である。思想は、一般に、普遍的な妥当性を要求する。しかし、どのような思想も、言語によって、すなわち多様でそれぞれに特殊であるほかない言語によって表現され、文字によって——それが要求する「普遍性」に相応しいだけの広域の人々の間に——波及していく。思想が要求する普遍性と言語や文字の特殊性の間には、ギャップがある。このギャップを自覚したのが近代である。普遍的なるものが可能であることへの信頼こそが、思想を成り立たせている（必要）条件であるとするれば、言語・文字の認識についての探究は、思想がいかにして可能かということに関する思索としても解釈することができる。したがって、言語・文字についての近代史は、思想史であると同時に「メタ思想史」としての意味をも持つ。本論文は、このような問題意識を基礎にして書かれている。

論文は、「文字分類学」「俗語論」「言語起源論」「一般文法」「普遍言語構想」「正書法」といった主題ごとに、展開を説明しているが、上記の問題意識にそった、諸主題間の緊密な連関を簡潔に示すために、ここでは、歴史的変遷を主題横断的に整理するかたちで、論文の内容を以下に要約する。

「大航海時代」、すなわち（西洋の）16世紀は、上記のような観点をとった場合には、近代への端緒となる。この時代、宣教師や旅行者を通じて、ヨーロッパのそれとは異なる文字種（特に漢字）が発見され、興味の対象となった。このことが思想の世界に与えた衝撃は大きい。かつては、普遍的真理は、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語等の古典語によってのみ表現され、古典語と一体化していた。ヨーロッパの古典語とは異なる文字種の発見は、古典語と一体になっていた普遍性の領域が相対化され、失われてしまうことを意味する。こうしてできた空白をどのように埋め合わせるかということが、それ以降の言語と文字をめぐる思想史を規定することになる。

ラテン語（古典語）の相対化と並行して、俗語への興味や俗語を称揚する言説が現れる。あるべき俗語を「光輝な俗語」「宮廷的俗語」等と表現したダンテの『俗語論』がすでに示しているように、普遍的であるとされたがゆえにラテン語が持っていた性質（超越性や持続性）が俗語に転移された上で、俗語は理想化された。大航海時代に俗語の文法書がさかんに書かれたという事実も、こうした解釈を支持する。かつて「文法＝文字（グラムマ）の技術（ティケー）」とはラテン語そのものを指していたからである。ラテン語的性質の俗語へのこうした転移は、19世紀の「比較言語学」への伏線になっている。

17世紀には、「一般文法」（『ポール・ロワイヤル文法』）が登場する。一般文法の「一般性」とは、諸言語から帰納されたものではなく、（実際にはラテン語とフランス語が理念的なモデルとされてはいるが）どんな言語にもあてはまるとあらかじめ思念され、先験的な準位に措定されたものである。大航海時代を通じてラテン世界と同一視されていた普遍性が否定された後、普遍性の欠落は、西洋世界（ラテン世界）をその一部として含み、諸世界をその内部に並立させ、相対化することができるような抽象的な普遍空間が想定されることで、埋め合わされたのである。「一般文法」とは、そのような普遍空間

で成り立つ文法である。さらに、普遍空間において流通すべき言語を未来に向けて構想しようとしたのが、この時代さかんに提案された、多様な「普遍言語」である。

18世紀は、言語起源論の時代である。啓蒙思想家たちは、言語の起源に並々ならぬ関心を寄せた。言語起源論は、17世紀に見出された普遍空間を時間化したものだと解釈することができる。そこで主題化されているのは、いずれか特定の言語の起源ではなく、言語一般の起源だからである。18世紀は、17世紀と19世紀を繋ぐ蝶番のような位置にある。抽象的で実定的な普遍空間を継承している点では17世紀の延長上にあるが、それを時間化した点では、19世紀の「言語の歴史的系譜論」の前史にもなっているからである。

19世紀には、「言語の起源」に代わって、「起源の言語」を明らかにしようとする試みが登場する。その代表が「比較言語学」である。古代インドのサンスクリットのように、空間的にはヨーロッパの外に位置する言語に、時間的にはラテン語やギリシア語といった古典語よりもさらに古い言語に、視線が向けられるようになった。いっそう古い言語に、諸言語に共通の「根」となるような言語を突きとめようとしたのである。起源の言語を見出そうという強烈な情熱はどこから出てくるのか。「一般文法」(17世紀)と「比較言語学」(19世紀)では、異なるタイプの普遍性が前提になっているということが、このことを理解する上での鍵になる。一般文法においては、諸言語を超越した普遍性が、アプリアリに措定しようということが前提になっていた。それに対して、比較言語学を駆り立てているのは、普遍性の水準が、個々の特殊な言語から独立には存在しえないという感覚である。その普遍性の水準を直接に取り出そうとすれば、結局、諸々の言語がそこから発生してくるような「起源の言語」を、——ただし普遍性が特殊な言語とは独立には存在しえない以上は——それ自体も特殊な言語であるような「起源の言語」を、つまりは印欧祖語を、見出すしかない。

19世紀の比較言語学は、祖語(起源の言語)と同時に、「今・ここ」で話し=聞く言語(母語)にも関心を寄せる。母語を用いる主体(民族・国民)が主題化されたのだ。17世紀の普遍言語や一般文法は、話す主体から独立に超然として存在しえたが、19世紀にあっては、普遍性が特殊な具体的言語から離れては存在しえないのだとすれば、必然的に、特殊な言語を話す(=聞く)主体へと視線が向けられることになる。その結果、19世紀には「音声中心主義」が顕在化する。

以上のように、本論文は、文字と言語をめぐる探究がどのような「普遍性」を前提にし、また措定しようとしてきたかということを中心とする主題にしながら、16世紀から19世紀への西洋思想史を明快に整理している。

論文審査の結果の要旨

本博士学位申請論文の価値は、次の諸点に認めることができる。第一に、言語や文字をめぐる知の流れを単純に祖述するのではなく、思想を可能ならしめる「普遍性」の領域がどのように用意されたかという問題意識のもとに言語思想・文字思想を整理することで、「メタ思想史」(思想の「可能性の条件」がどのように与えられてきたかということについての思想史)とも呼ぶべき研究の新しい領域を拓いたことを評価することができる。言うまでもなく、言語学や文字論を、それ自体として取り上げ、その歴史を記述した研究はすでにあるが、そうした知を、思想の可能性の条件をめぐる探究として解釈し、より広い思想史のコンテクストの中に位置づけた研究はほかにない。

第二に、以上のような問題意識のもとに言語と文字についての知を整理したときに、「16世紀/17-18世紀/19世紀」といったきわめて明確な段階区分が得られることを明らかにし、さらにそれらの段階の間の「移行の論理」をも示した点を、論文の意義として挙げるができる。この段階区分は、ミシェル・フーコーが『言葉と物』において抉出した、西洋のエピステーメーの諸段階、すなわち「類似性の知(ルネサンス)/表象の知(古典主義時代)/人間主義の知(近代)」とおおむね対応しており、このことは、論文の中でも繰り返し指摘されている。しかし、フーコーの場合には、段階の間の断絶を劇的に強調することに力点がおかれており、そのため、なぜこのような段階の間の移行があったのか、という問題は問われることなく放置されていた。それに対して、本論文は、失われた普遍性の領域を回復する試みとして全体の流れを理解することによって、段階間の断絶と同時に、段階の間のつながりや連続性をも示した点に独創性がある。このことは、たとえば18世紀を、知の17世紀的な構成と19世紀的な構成の間の「蝶番」であることを示す論述の中によく現れている。特定の思想家や学派に特化した思想史研究とは異なり、本論文は、諸思想の間の共時的あるいは通時的な関係づけに主要な目的とする。そのため膨大な量の文献が渉猟されている。

第三に、言語論よりも文字論を優先させた点に、本論文の特徴がある。もっともこの点に関しては、本論文における、言語論と文字論の区別があいまいで、そのため、最終的に19世紀の「音声中心主義」へと収斂する思想の流ればかりが強調されているが、固有に文字に焦点を合わせた場合には、音声中心主義には回収されない文字についての認識や感受性も見出されたはずだとの指摘が調査委員から出された。しかし、それでも、「文字」の側から言語にアプローチしたことの意義は認められる。たとえば、近代の思想家が強調した「俗語」や「母語」は、「音声言語」の問題だと考えられがちだが、本論文は、文字に関心の中心をおいたことによって、これら「音声言語」自体が、固有の文体や文字に媒介されて成立したこと、さらには、こうした「文字による被媒介性」を隠蔽しようとする強い傾向性があったということ、こうしたことが明快に示されたからである。

第四に、本論文においては、文字や言語についての知を考察することを通じて、近代の西洋諸思想の総体的な関係が抽出されているため、ここでの知見を、思想史研究を超えて知識社会学的な研究へと発展させうる十分な準備が整えられている。本論文は、西洋の各時代・各段階のさまざまな知や思想が、相互に直接の影響を受けていない場合でも、互いにきわめて類似した構造を有していることを示すことに成功している。知や思想の間のこうした類似性・同型性は、それらの知や思想が社会構造や社会的体験に裏打ちされていることを示唆している。そうした社会構造や社会過程の解明へと探究を進めていけば、社会思想史と社会学が総合されることになるだろう。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年11月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。